



茶話雜談
坤

^ 13
2749
2



茶話雜誌

三之五

坤

甲子
2940
2止

印 13
2940
24
B
2749
2

古今
寧説

茶話雜談卷之三

目録

- 一 細川之赤松の家士某加増之事
- 一 水戸黄門光圀々之事
- 一 中田安丸赤門之事
- 一 一條殿不自代土破丹治守伺公之事
- 一 板倉伊賀守了意子念の字残事らび
- 一 行脚の傍款と詠歌殿説と入事



- 一 小野の通系紙を作さる事
- 一 尾沼瑞瑞本し事
- 一 浄瑠璃を文之来由
- 一 尾沼松門の事
- 一 氏義の海兼井し事
- 一 尾沼池田海辺の事
- 一 京都古町し事
- 一 大坂町中三台の事



古今
寧説
系治
雜談
書之三

細川三斎翁の家士某加増し事

細川越中守三斎翁の村新系の士何
 某とくや巨砲られしに戸を去
 屋敷一使系紙中付られし先登交ま
 ち力お歩おしに竹寺の法名の作法
 不案内のたの由を法名をせし
 時先の士云く是ハ吳の式礼を之

唐名を呼ひ黄門くと 祿を重し御之
熱く武家の官位ハ孝と皮位の外
と仰り高貴と仰り事あり有る家ハ
唐氏中書又他々々々是と唐名も
中書と仰り事あり為由結仰り事
武家友名祈て唐名以事あり

中田安成事あり

大坂天守塔力中田安成唐の事あり

諸乃の運志もく孫と上戸あり是も秘
為の巨益あり古勳體也金也
酒八合をかりと入と事ん自ハ高貴
飲はめめある高陽の酒徒と事
かん若越養子智伯の頸也飲事
とありいり事あり史記位見又之の呉元甫ハ
又勳體盛酒飲清風事あり是事
思ひ事あり相好なり

一條殿下近思縁講釈の事
一條殿下近思縁講釈の事
一條殿下近思縁講釈の事
一條殿下近思縁講釈の事
一條殿下近思縁講釈の事
一條殿下近思縁講釈の事
一條殿下近思縁講釈の事
一條殿下近思縁講釈の事
一條殿下近思縁講釈の事
一條殿下近思縁講釈の事

しゆくうらなをまゝ講釈の間待せ置れ
之後近思の字は正當の爲帽子物出
ゆく正せものごとく爲帽子の例は正
かゝる備を又母後等誘引の事
一間隔て平伏して居る處下の作は母後等
との事多し一声は存抱はさすの事母後等
ハ始終平伏するアト其の中と其法を又
母後等よりれり其後後より退る事

雍州府志同文

殿下の西對新ハ若別のるせりしと中々

板倉伊賀守了意ハ倉の一字残

文ハ

浪島新迎堂西川の弁中院と子角倉
ヤシと堂ハ古ノ京師四方ハ西倉残
是年穀ハ積置ハ荒の用又建堂ハ之
吉田了意又了徳母殿の保博より了意
来り任中全依て了意も信の時ハ角倉

与市之号世里板倉伊賀守勝重京

乃司代の時了意ハいづく古方名字角

倉ハ是雅多ハ古板倉の倉の字也

与ハ人乃向後角倉と訓キ唱子也

とハされハ古文字ハ訓ハカキキハ古

めハ今ハおつても倉乃又ハ堀氏とハ

古方語ハ古姓也

行脚の僧教残海敵覽ハ

近書大園の庭の櫻成りありし以て法園の
柳の傍をけくて紙の奇成七身後ひ
てありぬ

い花の形ありて又や生きたん

いとひ果ては浮世ありぬ

大園の庭の櫻成りありし以て法園の
とこれに其後法園の皮ありては法園の柳
よ思ひ入るる奇ありてありては花のさ

五文字 梅花のさよこ花 咲花とありて

よかると勅定 抱きさきしとこいあり候は

有らんよかると 勅定入候は 勅定あり

顔の右園ありて 以て感をわする候あり

と真如の叶、極とこいあり

小姓の通る紙と作る

花浄障紙の来由

少姓の通る紙の来由 改新湖月尼公の傳

雍州府志和事
始茶話
雜談煙霞綺談
浪花土
産等
此説詳也

有り天姓ヲ知ルニ多ク其子孫ハ傳レタリ
一日所ノハ、其子孫ヲ知ルニ何カ
も其紙を傳へしと命せしむるハ彩
の内ハ長生殿十二段と云ハ其紙を云ハ
故向傳ハ矢新ハ淨瑠璃娘ノ事也
十二段ハ傳ヒテ其ハ人ハ其紙ハ音曲
写シテ傳ヒ出セリ其ハ好申ハ其紙
ハ淨瑠璃子ハ傳ヒ出テ其ハ其紙ハ人ハ

曲調ヲ傳ヒテ今ハ世ノ所ニ其紙ハ
人ハ其紙ハ其紙ハ其紙ハ其紙ハ
と云ハ其紙ハ其紙ハ其紙ハ其紙ハ
其紙ハ其紙ハ其紙ハ其紙ハ其紙ハ

淨瑠璃太夫ハ其紙ハ其紙ハ其紙ハ
其紙ハ其紙ハ其紙ハ其紙ハ其紙ハ
其紙ハ其紙ハ其紙ハ其紙ハ其紙ハ
其紙ハ其紙ハ其紙ハ其紙ハ其紙ハ
其紙ハ其紙ハ其紙ハ其紙ハ其紙ハ

て宇治に實孫友平好澄といふ中古老人
の墓に就ては重大坂井と浄海理の祖と
井と市良と傳といふ故号福孫同竹本
義太夫元々天王寺近百姓とて姑ハ天喜子
為郎と傳といふ系宇治孫友平子亦あり
御成りよりあり故大坂一里一浦成行
本孫孫孫とて更成世々止保年中江戸
薩戸太夫といふ孫友平といふ者も江戸あり

是浄海理の祖あり刺殺して浄雲といふ
時同じ孫友平といふ浄雲才子も母後太夫
長門太夫丹波太夫源太夫とて四人あり是以
曰天喜といふ今の浄海り太夫浄雲の血
脈ありぬハあり芳ハ一脈あり、福孫りりの
ありしハ浄雲より成りぬハ初来し是江
戸半太夫切名才とて悪といふ本傳の子あり
此方太夫ハ流成智ハ故一流成成り也

刺髪して坂中樂堂と云り如記流ハ成
さる事ハ古事ハ身子ありお徳好虎と云と
子是も二代ハ古事あり身子ハ 海あり文作
若近松門ハ古事ハ元禄初の年京初ハ
家ハ使難事と云元禄初の年京初ハ
お史奇露妓芝居初云の徳者より各後
大坂下り竹下ハ浄法理仙と云り平安堂
菓柿と号ハ七十五歳ハ 享保九年

子死を云り行成成作り吾奥より
辞世と云り人云云

史辞世と云り物ハ古事ハ子ハ
記し句り

奇露妓芝居ハ長十九年ハ後流ハ成
と云女ハ出雲大社ハ巫女あり名護屋
山云りといふ古事ハ密通と云京と云り
露妓成集のく四葉川京ハ芝居成也

是成始のとい千後寛永年中 女奇無姓
河製禁有とより今のいぬ名流部芝居と
あり

武藏野場集の并し事

享保九年申辰四月坊号寺中 昌泉院
清光池弁小は乃人 就難皆田九帝四所 研屋
笹部伴善太の若も 上下八九人より位列
善交ちる名水坊しゆり 移文 頌礼し

川越領疎通りりる 竹分る 堀集の井と戸
古記の是のり 由 浩芳 在系中 将葉年の
詠歌

武藏野場集の井と名水の疎
妖 やおよ 近つる あり

か柳の流より 名歌と 是のり 家次郎と 一見
いふ 盆より あり あり あり あり あり
家裏より 女一人 約籠 疎通り あり あり

しよ堀の井と云ふ則私共今水鏡汲
のしよ堀と云ふは堀の井と云ふ
しよ堀の井と云ふは堀の井と云ふ
しよ堀の井と云ふは堀の井と云ふ
しよ堀の井と云ふは堀の井と云ふ
しよ堀の井と云ふは堀の井と云ふ
しよ堀の井と云ふは堀の井と云ふ
しよ堀の井と云ふは堀の井と云ふ
しよ堀の井と云ふは堀の井と云ふ
しよ堀の井と云ふは堀の井と云ふ

しよ堀の井と云ふは堀の井と云ふ
しよ堀の井と云ふは堀の井と云ふ
しよ堀の井と云ふは堀の井と云ふ
しよ堀の井と云ふは堀の井と云ふ
しよ堀の井と云ふは堀の井と云ふ
しよ堀の井と云ふは堀の井と云ふ
しよ堀の井と云ふは堀の井と云ふ
しよ堀の井と云ふは堀の井と云ふ
しよ堀の井と云ふは堀の井と云ふ
しよ堀の井と云ふは堀の井と云ふ

此四形之地所謂堀兼之井也

蹟也恐久而遂失其処因以名
井欄置于柳中削碑而建其
傍併以備後監
里語掘而难得水故云尔以兼
通难未知只從俗耳

宝永五年戊子三月朔旦建之

此石碑、秋元但馬守喬知よりお建言由
碑銘、林彦酒の法生松村口帝を傍お認め由

是社祇の場子の井あり古教あり
之に讀まじり古の古の昔の花柳のとの
讀の奇致の存念のや中から何事とも
ありてさうさうありてさうさうありて
人生活り以下謙念海乃ありて世なり毎
年く右大乃原頼朝公鯉魚を一本て貢
又此の事ありて右の鯉魚を柳の花柳のとの世
下あり鯉魚の元落りの鯉魚ありて世

井へしを落しやゆき昔咎も依り右の
死罪の若く死刑より進み相果る時分辞せよ

堀子の堀兼の井の井此底よ

我を恋はる鯉や一ツけ

玄苑の堀子の井の井の田よ

恋そつらうと鯉そ一ツけ

か程は流りてお早戸舟寄我在るの業原
の歌のよゆ他よりともたあそはあくと妻

柳そのりて重しと色ハ何事も柳と流し
お逢りぬきそ右の舟書あし内よりの飛
柳と兄ハハ何國ともなく消失早ぬり
まも流る残る舟はまもと流るゝ知進これま
たの魔宮、まあしりくの中中逢合せ
らるゝたの孤ある者ハ兄ハ中々あし一着も
沈芳の飛柳のよの幽霊あそとつらきや
とつらきも合はしは回向致し強通るう則

戒名我淳生過縁と書身廻向一ぬ世事
此るる半のす一丸くす物語り其怪しき
半あり併まきとく人あり其為人の修り
吾の修り或人我教とく昌水院法光院
卯より修成求めり其の修り此れ太の執
か一と遠のき来世の不思事といつる
太極兼の井乃修ハ武家許懲記と云
書よぬ一故家又記也

栲呂池田の海辺あり大なる池
永し事

近湯殿河科栲呂池田の渾水海邊あり大
なる池網あり其の金の小き札是に甘
きし也友より河をひうち破りたり其代
官少なり其道ハいと所変半なり連龜と
孔と銭近湯殿河鏡又入し其の破り
故又字ハ金く是く以康熙何年其鏡よ二雷

おりしとちるるはくそめくまし

孫堂家升形之紋調子の事

高堂高虎徹給るる升之條より成
嶺とて升成状ありて痛れぬ内堂の
云く升を極よすも其の知行も石多し
と流すは是等角なる事なりと之り言
虎堂はく我毎の事なりと云くは戯
とれしは昇とて衆成起る三十二万

の大倉なりれり凡毎の子名を知る
無事重 此く升形を家の紋とせし
今用ひらるる 昔の紋ハ一衆兵部及
形り 或曰高堂家 此形に重き御旗
白練結まの丸ありと云より 歌離穢
傾東海去の文字の重之別大樹の和尙
初めく家康公執事と云くとの

京都古町新町に伝

下京古所と云ふ昔尊氏將軍の末代
威衰く多ひく戦ひ多く京都所人と
離散し在るも被言ひる一かこつ相
里是所り下京言念より東ハ一面乃
河原もく建家と是向く五条通今の
松原是より下ハ野田河原もく所りよ
天正年中 赤尾赤松公所代も此所り
大坂西奉行の口前田浦長治云以赤

法中園名もて五百石領せしれしを京都
の徳貞代も作せし是ち社寺並兼常
ありし勸め言はし時を残りし一町家を
今在所と云はれり此所は町家を來せ
しを新所とし下京ハ所散りしこゝ是
所りむち社町中ニ入の所りしを大塚
赤松公京都末と繁昌の爲と一石是
町衆入のち社を町の外に引別

作をいささしりたりと仍く尚新自代法管
院上意又但せち社を所の所引移し
と重右徳管院日蓮宗と云ふ 院を
家宗の大切又老僧見負の所法平
て我宗の古残上京の地^土云く水鏡
と云く在る多き所を地をりて并に
解宗上京と云りし地を河系の上
中へ移さるる所を浄土宗の与と云く

河系通六条近のち院別教お慈の代地
とされ引並いつても水鏡又及ひしと
時移り代移り法所の物是れと云く
今ハ無名昌の所地系極通ト号し時代の
習ひをむりしハ火鏡水鏡の所ハ六角堂
の物鏡をつき強勁と及ひしや天下大
平の所又静謐し民衆振ひて平通
高ヶ由水鏡を見え立鏡を動かさるる又

古所といふは古の残里言念よりなり
河原ありて河りし地を東に東側河を
り南に西系橋系より下ハ野原り北に系
通の南側を限まじき所なり所は方は
より河りしと下系古所といふは之利五組
より北に角を以て長組中の組
之町組川西組巽組と号す此河西と云
川ハ西側河に北川ハ平出陣着野那

の谷川あり昔より涌流きの河なり柳
ありともし史よりけり此河は都繁栄
民衆大分あり昔より又井を掘りあり
自然と涌出ありて水の流きとあり
史あり川の東に地形高くえより北に地
形低くして谷川とあり事然や北川の
西に西院川是等田川あり

大坂町中三合ツ説

東照宮式時南光坊は河を以て
子孫繁昌を祈ると其時南光坊曰く君
何をも惜まざるの残存あり西子孫長
久あらんと誓ふに我輩は其の依見傳
はる事傍の祠はほひけ城破損人と云
なりとのまの傍に然る事ありし中
故則寺井大原色と云くけ城をこま

きく一 作合らせぬ是より依見町人
と下の裏微を歎き大坂は住ま仕度
の男町屋をた下されけり頼朝の事
ハ家康公に事ハ松本下総守換校を
去後又頼朝の事ハ頼朝の事ハ
の作合されし二十三年依見と没
て先大坂へ移りし 去程又大坂ハ川
の里を飯と云西行ありて 船場と云

元來郡名別あり西成東成の路異を
とりとも、祇場を別り分て支配とあり
了りけり、あつた小限し、去内半ハ北組と
異し南組と、是別祇場の南西、大子小
廣き故、又分道ハ外側ニ丸印と、俗子
いひあり、六ヶ浦也、上徳及、作是之能り
又今度依元を、所を、を里に、来り、
教多あり、是も別、大段祇場、あり、分配

不聖、又、何りハ、依見、組、字、一、組、を、世、村、立
ら、是、始、り、三、心、と、分、り、多、り、所

古
院
系
新
雜
誌
卷
三
終

古今
茶話雜詠卷之四

目錄

- 一 永井日向守嶋津、虎皮取置之事
- 一 八尾木村惣次郎之事
- 一 豊臣大國有言温泉入湯の次々
南若院へ令せらば之事
- 一 濃列百姓の老母長壽之事
若江城の白書院の詠め事

- 一 近湯應山公柳大明神和奇車納之来
- 一 江戸小船町同屋茶作畧其く白奥也
- 一 賣利致行し申
- 一 法昔法急素物之事
- 一 大鼓持名也之事
- 一 丸山金重河津亭主茶明之来

古今茶話雑詠卷之四

古今茶話雑詠卷之四

永井日向守之薩人守虎皮不坐来
 之薩人元来大玉なる先年永井日向守及
 梅田之櫛の味也然之なるより一日酒後中其
 所出會河多之薩摩也及ち其酒不坐中及
 来其くと虎皮一枚障泥より用ひ及りか
 たりといふ言はれ申する其下城の善屋及
 此立其るるよりく其より其をいふ史より

西より百を越し少くも何百に達し廣く
いやくは虎皮の事あり是れは年法中
廿一は是れは虎皮ハ廿五枚目級のこを
しとみは是れは皮ハ廿級より同しと
虎皮百枚つて五枚は是れは何れも
うらみつて五枚つてこの内も何枚も
以て獲るべき事あり物も何れも
一枚を内もつてとて是れは水井底も

何れも中されし物ハ級の物ハ
此虎の皮圍方其ハ子扱も何れも
ありとてそ家中へつて是れとて

尾木村惣乃出つて事

大坂陣の時 家康公の御前より
侍の人の中より昔飯ハ麦より
西より中よりハ 東照宮御より
麦の昔飯を百よりとて是れは

乃色ハ新理人下役心々精麦と求
め来久しと農家の中は乃色ハ天香
七色弥ふるく乃色乃色古礼と許す
百姓町人とのふ門戸を極く近失空
屋をふるまふ色ハ誰くも平賤ゆき
求む道古く不ハわと人々あり穀は
是るきよし中なるふと久家古
乃多し かの百姓の兵糧中ハ麦あり

世上の治乱は抱く乃色中事あり
と中せハ是遊るく川を越ハ尾舟
東ののち屋は部といハ衣屋立お役人
は對面し先物來合の新理とあり
酒をとりめを流す乃色素儀ハ木村惣
と中代ハ七色の吏督ハ相精麦所用の由
御新様より御多し乃色禰り乃色生
乃色又乃色ハ別を合ハ精麦五石

繁子二丈出させ世に西軍の入りて
石中野原の大軍ありて
らむ之妻ハ事人又そそ世業も有る
里のりんと云れハ取え来カハ常と此
未と有る繁子も事ありハ面
何の如く仲ありて
為し一葉ハ今一カ
振西軍を有る繁子も世に
一

いそり有る繁子も
と繁子も一と陳茶履
職婦見一ハ只
あつたる繁子も
交せんも
只一姓ハ
也為るも
以行日也
我も
行日取らせ
人
と
先
立

茶臼山、急きりふ程なく、西中陣、急
り、波取言ふり、下り、料理司、小部と
治色、料理、別、西尾、若、若、若、守
り、若、小、若、及、以、委、細、演、説、一、唯、一、通
の、説、又、あ、く、先、左、左、ハ、飯、さ、ま、ま、さ、し、中
さ、ま、り、る、ふ、依、く、御、座、所、の、役、人、刻、切、紙
又、諸、五、上、書、さ、ま、ま、又、云、日、曰、く
物、御、利、利、求、し、處、あ、く、精、麦、又、石

献上物、わら、り、る、右、山、追、り、可、有、御、座、所、
志、也、仍、多、如、件、

寛十二月日

御座陣、御座所

役人、下

八尾

本村惣、及、出、門、及

御料理人、御座所、の、役、人、五、人、對、面、一、之、酒
を、急、め、の、ま、と、下、り、し、め、と、物、合、せ、物、強、走、り、て、以

法皇其後一以是ハ社座案小北邊一
御目見クニ世叶ハ流もせわく板倉西尾
乃其ハ出云子為る事有るを言ひ一
暮又及ハ此事多き所了る是ハ彼法皇
ト云一ハ退出一と云ハ初め来里一取
の古ハ松櫃ト用之一五町半里送り
海りり去後其處是を縁母一歳其の
所初る云々も勤め終る入里人ト云

お程多ク御和曠ニ倦り一御上信阿是ハ
力有るおろくら多りり、翌年五月廿三日
幕堂和泉子孫ハ一酒分のうらるハ奥品
智弱多き来り一民家也礼始出
法阿り一子を送娘又貞ハ一四方八方
外より一ハ以て居るハ一踏る我
お信也一ら一令信居敷一ハ一
其外ハ縁の者一人ハ教三ハ波法

文箱の八巻く蓋の上の葵の御紋と画
き長俤の先は付く高く若上居る里
り巻ハ陣衣の道も是をこそ或ハ思
或ハふ審く敵くけハ尾七卿ハ下
溢さりしとや初ハ智より仗を以て子
細やる子一ハ在る葵ハハ是ハ舊冬
茶臼山、鞆ヤ一のありそ御座長員ハ
手をとされとらめしや西院あるされ
る

さハ是ハ西出るるを一ハさいりめく
久延ハ見み事ありとやと切紙今
又傳へく系卿衣を木村甚七郎といふ者
不物也

鯉ノ語リカ

大根五辛の口刺一種山葵落葉
吾外海苔の類四ハ如多飯ハ谷
赤々熟を腕より里太の刺物と云

此作せり高州の任信、淡西大徳容侍
 大子肥好くも、子以大き子、是れ有る事
 此れを殿下無せとせり、以法師の以を空
 よりつと、修有利体や、そとの好め、空
 子写し、矯させり、今世は河好、此處に
 子空ハ、以事あり、寺記の執り、くのや
 淡濃、因百姓老母長壽し事、
 淡江城、西白土、此れも、詠奇の事、

正徳三年の此、淡濃、五百姓の老母長壽の
 考め、
 嫡子 九十一歳 二男 八十一歳 三男 八十六歳
 四男 八十四歳 五男 八十二歳 幼女ハ、南年、百才、
五才人 五才人 五才人 五才人 五才人
 此の十月中旬、江戸へ、百才、淡濃、御目見、
 西白土、此れも、あろひ、何れハ、女中、了、
 八才、一、女、老、女
 年より、老を、持、て、若、く、そ、人、の
 倉、あり、と、也、あり、ハ、三、と、せ、ん

かくの如く尚ほ子孫せしる者も取入る
しと我首尾よく水目見く後し黄金時
服多持飲し海玉せり

近傍鷹山云御大明神和を奉納し奉
山城本懐の里南五ヶ村は柳大明神也
あり九月廿六日祭多あり下をい色牛の
好子奉ありて百姓強欲は及ひ候近傍
殿中と違ハ丈ハ不便の事なると云は候

いづか我々西宮のありて柳大明神と
中よりいふと云ふはたのありて明神と
細くいふと云ふはたのありて明神と
忽ち牛の病止め
近傍鷹山云
つとれをいふ柳大明神と
あつたをいふ

宮本所所河を奉納者も白魚也

賞の里利を以て事

伊勢桑原のとの江戸の船所四又三又九
十月迄ぬめく白菓と子物を馬一匹と
臺より多波長之形なり又能村の事
一とそ言取の件の間知友人を以集め
白菓を大分汁吸物好み次山と料理
振舞うる以人の子孫の如く珍貴と云
列の我賞物を逐修し料理に用心を以

とも同屋の仕業故を修めせしに如き料理
又汁も若くも大分好む事ありては
せれば彼人多く是ハめなる事あり
いす、業名も此一を好む事ありて我
俸も食さるものせしは、江戸まゝ物
も金もたんとて之を振るといふ事
といふは立いひた事ハ亭主云極め
なる事ありて、忍一ハえりて、我ハ

水任せりてきて相飲飯後魚在中一人也
あり一は今皆別より多白魚下りてとて
け白魚を少さる平儀約十筋えりる金
市をとりて賣りしは本ハ金一両五匁三
あさり終り又合半の白魚を金五十五匁
又賣立やりしあり是れを彼人悦び合
是せしとていりるゆゑのハあさりよる人も
賞し稀ありゆゑにせしめりるれハかく

おののく免事多の作畧を及ぶか
このあま

諸君素物事

昔ハ下りて朴素よく徳念源二位の時候
魚飯を妙く朴の多を月ひしを後或
人楮の多を月ひしは友九良盛長眉を
ひきめりて曰世已ハ文章又福なりと嘆けり
私ハ曰五六十年来の事京都の町人福あり

のそのとくは四神の勢磁急ハ多クハ行。
其祇堂を會ふと小窓を窓ました塔桐の
影を從ふあまゝ素麵を盛りと古堂の
の傍らまゝ今ハ南京錦衣の袴四角の
羽ハ此桐多のかいしとてハ少づゝと今
る

大鼓持居物之事

負家の此太平の餅は又此山屋京初夏

有ハ子牙ハ遊玉子ハ不也 驕念不い
なま太鼓持とよとの何多 何少也 吉吉
願西花垣元吉林樂彦及男 皆あま一中
是ハ池柳弓垣西町妙福寺西本野流
下住持は多物弓浄海程とて者ちと多進
院せとて老及出ハ字所六角南所住人
衣被の纏也せり平生おととて人あま
仁舞ふとて 舞とて酒興の上を乱る

漸く召子出し波指物四好二枚研子
吹せり新く殿を西の山也
近習侍十人こり里百達了可 四好入来
此七ツ時を慰物了了 翌日用人来
此の費用書付出一の帳よりあり
其多食又新く大さ小茶のせり近習
茶下り九八十茶人通例の飯代を解
殿の酒指物一式の費用之費用と出

其里大さ小茶其多茶明世一法座
修養費用等御指一式、盛と一り可
極茶酌の事と人の感せり

大真主の忠告と一りなるる茶
室より出

古今 茶話 雜記 卷之四終

古今
實說

茶話雜錄卷之五

目錄

- 一 紀別家蜜柑之事
- 一 箱荷山二奇事
- 一 款靠妓沒者若十良之事
- 一 天竺寺和高土師相及雜聞之事
- 一 西山公篤行之事
- 一 松平加賀殿將軍家御成之事

- 一 油日屋佛堂の事
- 一 大黒屋敷花巻残株の事
- 一 之文字屋平尾の事

古今
聖記

茶話雑話巻之五

紀別荘蜜柑の事

紀別荘より例年六月土用中、公方様より
 始め御茶の事申、流石、没人中、蜜柑
 西音伝せり、や一年井上河内守及、
 の時をせり、紀別荘、西流、
 西對面の上、某生得、
 一、感、
 見、
 生、

後立河りてあぐさ、役人める秘事ハ借更
セ、其のやくせ里望みられ、折又紀列
より里も、偽の如く見事の密書、指言伝
し、只その所、渡り、年、れ、西、舞、面、の、と、め、く
井、之、度、中、さ、れ、ハ、去、年、西、役、人、之、か、ん、の、借、更
家、来、西、役、人、之、か、ん、の、借、更、用、意、仕、り、て、も、借
と、折、換、一、ツ、も、役、立、中、さ、り、是、ハ、め、り
被、仰、り、や、さ、り、さ、れ、ハ、紀、呂、殿、書、夫、ハ

本、ご、あ、り、西、事、ハ、あ、り、と、て、去、役、人、を、西、前
百、出、さ、れ、去、年、井、上、殿、の、西、家、来、一、密、村
貯、眼、い、く、あ、り、一、書、一、折、換、中、由、作
られ、ハ、役、人、も、其、の、毒、ハ、思、ひ、何、ハ、借、更
を、秘、一、中、の、ん、や、丈、ハ、心、所、め、事、よ、ハ、西、家、来
是、ハ、西、家、来、さ、れ、ハ、根、も、も、子、交、と、中、せ、
故、り、又、書、り、さ、れ、ハ、役、人、云、貯、め、何、あ、さ、れ、ハ
や、と、書、ト、ハ、先、西、役、人、の、如、く、上、密、村、在、底

撥出—抄致控こもを安史、入めくを雨の
つらぬ振子用き仕立の不便く朽換せうと
中役人云何程のしかん西調是ゆりぬや之ん
凡五子斗も入り少りせ、紀原の役人大き
又筈ひく中し五子や五万の密村ありハ
こなく朽中へ事あり玉子あり調、ゆハ
しかん車は四五十柄し川せ西間は五万の
穴を掘りく又、諸事ゆ羽立等土用中

よむ—ゆハい四十柄斗も朽控りゆハ
又湖—五子や五万のしかん中、貯、梅屋
中へ—さ由を尸又まき井と及し西家来し
ゆをれ果大筈ひとありまらる

縮荷山二奇事

縮荷山は二ツの奇事ゆ多高社の供ひとの
としく狐ハ尤もさるる物な今山中又一足
と見あり一奇事あり又荷山の松茸ハ

名物多し其香味他山に勝れず其地
毎秋御下申又江戸御用にも召し一書に三
麦之妻少くは儀より召し奉行に召し
らせしはげ之書に終るは社中一切
松茸と門内、入道は是山の茸とせり
疑ひを破る人多し去處世間よりハ都々
産く松茸賞味せり二寄る事

寄舞妓役者坂田者十良と事

昔年寄舞妓狂云原坂田者十郎と事
其の里を素姓と名老あり寄舞の役
者又似や及又奥田之体と事針醫師
名醫師あり其法世を賞せり人々
傍より花車風流成好し尚世に
其里に秋の法應との然友曰く人云
合せ江刻大律の尾花成んやと云井
蕭小室、行進、之傳云尾花成んやと云

是く亦も来るもの即ち何〜天晴好
車の我ありと嬬り自賛〜尾花波
らうある古奇蹟〜ひ傍り無人と来り
しと彼落来と床北と居一人座酒
筒穿らる様とものあり〜く〜兄と来り
菰十郎ありとあり〜知〜く〜藤十郎と
各様ハ〜ひ〜く〜取〜能〜西出らひ〜と子
之〜云我よ今〜い〜ハ〜け〜の〜尾〜の〜見〜ん

之〜即〜誰〜何〜〜と〜名〜ひ〜〜と〜来〜ん
一〜等〜銭〜物〜と〜是〜と〜い〜ふ〜菰十郎と云
私等毎秋来り〜今秋ハお好ひ〜と云
外〜云〜と云〜名〜是〜銭〜物〜と〜云〜是〜也
実〜は〜好〜車〜の〜妓〜藝〜者〜あり〜各〜此〜ハ〜見〜る〜者
と〜れ〜あり〜〜今〜ハ〜何〜と〜云〜以〜近〜年〜中〜ハ
人〜と〜行〜ハ〜言〜難〜如〜多〜数〜尋〜問〜の〜水〜子〜山
座〜鳴〜亮〜音〜系〜秋〜出〜九〜条〜川〜系〜の〜菜〜花〜月〜ハ

下之曰佳系之是也
塔小海の月尺鴉柄
とる事行

月尺鴉柄ハ生醜爲鴉と俗ニ稱信
橋の事あり

天龍寺和尚土屋本居親問し事
一年天龍寺と本寺と定争論を事
後志江戸、下多ち社奉行所本居公事
所定ありこれハ本双方結中入結あり

其裁評源記所記中 評級及以り
土屋本居寺天龍寺評級被見所中
ハ何也所信法中又公事争論と以事
親氏の教又有や君や定事と以天龍寺
初高悟く然く以り本極所定所定
所不定より一其海状是、ちと定以一
引破り中さきハ所教記の如く親氏
あり公事申出者様、所定事を以り

是何より言ひて果ては流の極みと申出せし
ゆゑに其事其のつらき事と各々やと男女
お流の一日水戸及び行くと指間を流
り申すなりと申す事と申す事一通り申す
定めく申す事と申す事と負難きを
おとす事と申す事と申す事と申す事
とやと推し申す事と申す事と申す事
事と申す事と申す事と申す事と申す事

と及取申す事と申す事と申す事
文ある事と申す事と申す事と申す事
申す事と申す事と申す事と申す事
ハこみのおとと申す事と申す事と申す事
申す事と申す事と申す事と申す事
申す事と申す事と申す事と申す事
申す事と申す事と申す事と申す事
申す事と申す事と申す事と申す事
申す事と申す事と申す事と申す事
申す事と申す事と申す事と申す事

芳簾束るるのせ若しは我お方あゝハ次
の女子あり何のいづくぬかき人もあゝ大なる
言共の百仕あゝの世に福をそゝりしとあ
福ありかくのあゝくゝのくまを内の倉を積
るを好まれらる福誠な感一入らる事なり
是れし執事方此の心持の中歩ゆ在無終ハ
つても遅くぬらぬれ古物忘れを以る
あゝいさる内あゝあ連中歩ゆるよゝか

歩むるのあゝくゝ無終承り出るゝ孫は
感一なるゆゑに衣帯を博物と云仕の實り
海世の時あゝ西内院の孫あゝ石平の御旗
布あゝとの内院あゝも是れあゝさゝまゝ
ゆゑあゝ西院あゝさやあゝおゝ福あゝは
何りの夏冬の衣履も垢つゝあゝあゝりせ
やあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
とをともぬらぬらあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

茶ありめんのあゆ中なり久あゆ近町の

者中ハ元けあゆ中四十年茶よとありあゆ

あゆ長あゆ水戸あゆまてあゆ御旅行のあゆハ

あゆ自身あゆのあゆあゆかろくあゆあゆあゆあゆあゆ

あゆあゆあゆあゆあゆあゆあゆあゆあゆあゆあゆ

あゆあゆあゆあゆあゆあゆあゆあゆあゆあゆあゆ

あゆあゆあゆあゆあゆあゆあゆあゆあゆあゆあゆ

あゆあゆあゆあゆあゆあゆあゆあゆあゆあゆあゆ

とあゆとあゆあゆあゆあゆあゆあゆあゆあゆあゆあゆ

あゆあゆあゆあゆあゆあゆあゆあゆあゆあゆあゆ

あゆあゆあゆあゆあゆあゆあゆあゆあゆあゆあゆ

あゆあゆあゆあゆあゆあゆあゆあゆあゆあゆあゆ

あゆあゆあゆあゆあゆあゆあゆあゆあゆあゆあゆ

あゆあゆあゆあゆあゆあゆあゆあゆあゆあゆあゆ

あゆあゆあゆあゆあゆあゆあゆあゆあゆあゆあゆ

あゆあゆあゆあゆあゆあゆあゆあゆあゆあゆあゆ

是の如く祝ふる重毎毎年歳重を絶せんと西隠
居後御式立の如く御乃後御持無きと西隠
鳥帽子亦ハ燕尾と御冠と重とされハ又西旅行
の時分ハ御持持えり重御持るされハ西山、西川
の如く後終ハ江戸、御堂と重とされたとある
ハかり深の御持り重も御持えされ其ハ或人
中ハちと御系府る重と御持る重ハ中ハ
ハ御持ハ隠居の身ハ御持り重ハ系府の御親ハ不

相懸の御る重自然 古き重ハハ系府も
すハハ御持り重ハ一年ハ御持り重
御持り重ハ御持り重ハ御持り重ハ御持り重
西山系御持り重ハ御持り重ハ御持り重ハ御持り重
の重ハ御持り重ハ御持り重ハ御持り重ハ御持り重
中事ハ御持り重ハ御持り重ハ御持り重ハ御持り重
さハ御持り重ハ御持り重ハ御持り重ハ御持り重
用る重ハ御持り重ハ御持り重ハ御持り重ハ御持り重
御持り重ハ御持り重ハ御持り重ハ御持り重ハ御持り重

二日比及ひ加賀殿より侍者あり言良し
加賀中を過せりしに成も追りたりしに
安の邊にけり何れも見分る所見し
くし入来りしに成も中を過りしに
あもり得しに成も知角難治せれり
たも見分るに加賀守殿より是れ定めり
子吃んく見分る何れも難治せり
との事ありしに成も世にありしに

一飛越りしに己は其日四時に見分る
ら見分せりしに何れも難治せり
全張の細隙子を見分るに細通あり
きくは其の目見分るに細通あり
幼少ありしに其の子遠く位の隙子に通
りしに何れも見分るに細通あり
りしに何れも見分るに細通あり
中向ひしに其の目見分るに細通あり

いふ所年大工百斗子お押と一二十回
斗子堀をハ物時の百斗達達付しの上
かも肝と決さ色しとせぬ所あめ飯米ハ
と存心ハ別粒米一粒忘りて用さり付
所取ともかくの如く中さる下りめ飯米ハ
わなと中さる又ハ束との事取を海のもの上
中さるハいやくぬ多人散入の事取所屋不
めく綿合合一斗束飯米所あの内

入更り初る所ハ一見あり一日一粒攪
るされハ一斗毎斗を細ハ所取下り
所中百斗之百人斗出目通り庭と
粒米一粒忘りて攪出せりお修人
粒米と七斗不備一粒攪る忘り出させ
程取ハ所取とせしむる一斗一斗
野取ハ所取何れ何れ粒取中抑れ
支る取とせり一斗一斗成とせり

油日屋佛堂の事

室所四條南の筆張の油日也佛堂の事
お蓮とりの里世の奇怪の名そか一法何
事あり町御奉行の山と山と名火
所多変とてお細事ありとれと元来宗
依江島油日村と申在仁也生家号又利人
中の又仙堂のハ名子の比と多後生を教
今世と武時孫孫地仙友と告めよハ世事

念仏かこころ唱へて後生は極楽疑人
ある近ひ人々を宗と云とて申の心ハ仏の字
をあると云とて云とて云とて云とて云とて
善佛の心 念仏物と云心得りてと申よの事
佛の心と云とて云とて云とて云とて云とて
大とて云とて云とて云とて云とて云とて

大恩の故郷の依りて世の事

而立とて大恩の故郷の依りて世の事

有り生得正並い呼ある人品ある事或時
店あり年代も茶をきけし居るを見く
何ぞ割正せざる事ありし事反割こり
りか番取を呼く事反の割こり呼り今
か細く割せと云ひく事一又毒
取の云是ハ花茶めく事反めく事と云
有る事と云ハ胡記ある事なり我今
すい事反としき事ハ花茶と云いり

ては細く製茶ありき茶種ありく
川に採りしと付たり形は二条茶種を
束合せく事ハ是ハ茶の費ある事川
採りし我よりされり之を以て茶種云
き方折角なりと云ふ事ハ同ハ和よりされ
り製茶又用ひり事ハ茶種大を以て
きり少は少はのかり事と云ふ事ハ凡茶種ハ
人間性命の事ハかる大切の事なり物

此片紙のまゝさうりしきりのみく極つきの
事ハ如海にさうり又るく川に極つせらる
之文字を平丸出つ事

多念二條の菊、之文字や平丸事のとり念
ゆり平生少拙の終を書きく業と云ふは
一冊の帳をさく詠方より終む終の
價を記しを臘月の末よあられけ冊子を
を州一丈この先（或り）價の終を集めらる

謙又々々紙のあま生涯いふ年々のたのり
ん可謂葛天氏民矣世上名曰り里利
このむく和為先生の書 置是致えく
愧さるるん年

古今 茶話雜記卷之五 大尾



